第２部パネル　分科会 19　継続／大阪42

防災活動をどう助け合い活動に結び付けるか

提言

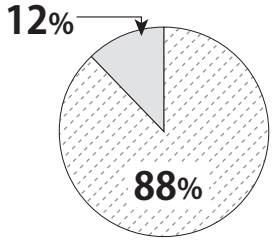
防災も助け合いも信頼できる顔見知りを
増やす機会となる。
いざという時に備えて、専門職とつながり、
できることから始めよう

登壇者

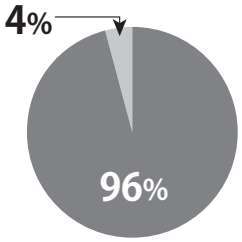
【進行役】　菱沼　幹男氏　日本社会事業大学社会福祉学部准教授
蟻坂　隆氏　石巻市民生委員児童委員協議会副会長
髙橋　泰氏　石巻市第２層ＳＣ
久保島　久和氏　（特非）鶴ヶ島第二小学校区地域支え合い協議会会長
小林　孝氏　コープ南砂助け合いの会事務局長／統括防火管理者
沢里　正雄氏　コープ南砂防災委員会本部長／助け合いの会副代表
髙村　重則氏　田島町自治会事務局長

アンケートの結果　参加者概数：324名　回答者数：138名

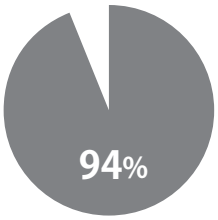
回答者の所属先



助け合い活動をすすめる立場の方



その他の方



議事要旨　菱沼 幹男氏

この分科会のテーマ「防災活動をどう助け合い活動に結び付けるか」は、大阪サミットからの継続であり、今回は東京都江東区のコープ南砂防災委員会本部長の沢里正雄さんと助け合いの会事務局長の小林孝さん、埼玉県鶴ヶ島市（特非）鶴ヶ島第二小学校区地域支え合い協議会会長の久保島久和さん、大分県日田市田島町自治会事務局長の髙村重則さん、宮城県石巻市民生委員児童委員協議会副会長の蟻坂隆さんと石巻市社会福祉協議会第２層生活支援コーディネーターの髙橋泰さんにご報告いただきました。なお、鶴ヶ島市の取り組みについては当初、前会長の細貝光義さんにお話しいただく予定でしたが体調不良により急遽久保島さんが登壇されました。

それぞれ防災活動と助け合い活動をともに行っている地域ですが、その仕組みは様々であり、自治会・町内会として活動している地域、自治会とは別組織として立ち上げて協働している地域、複数の自治会を含んだ小学校区で活動組織を立ち上げて活動している地域がありました。これは自治会・町内会の規模や加入率、役員交代の状況等を考慮して、それぞれの地域で活動しやすい仕組みとして生み出されたものです。

また、防災活動を行う際には避難行動要支援者名簿の活用がなされており、その対象者は助け合い活動で関わっている人々でもあり、防災活動と助け合い活動のどちらも支援を必要とする人々とつながることに変わりなく、それぞれの地域でできることから始めていく大切さを共有しました。なお、避難行動要支援者名簿は防災や災害時のために作成したものであり、把握した情報をそのまま助け合い活動に提供できないため、ご本人との直接的な関わりを大切にされている地域もありました。

一方で、外国人の方々が避難訓練等の防災活動に参加している例はまだ少ない状況も見えてきました。この点について、社会福祉協議会はコロナ禍の生活福祉資金特例貸付によって多くの外国人の方々と接する機会を持っており、今後は外国人の方々も参加しやすい地域づくりが求められます。

令和３年に災害対策基本法が改正され、高齢者や障害者等に対する個別避難計画の策定が市町村の努力義務として規定されています。今回の報告では実際に被災した経験のある地域の方々から、近隣住民によって助けられた方も多かったが災害時は想定通りにはいかないこともあり、地域の中に信頼できる人、顔見知りの人を増やしていくことや、普段から専門職との関わりを持っておくことが大切であるという指摘がありました。

少子高齢化が進んでいる地域も多く、またコロナでさまざまな地域活動が制約される中、防災活動や助け合い活動は、地域内の人のつながりを広げる大事な機会になることを確認しあえた分科会でした。

■ 寄せられた声から

- 防災を協議体で考える機会を作っていこうと思いました。防災につながるには「草むしりを一緒にするだけです」には感動しました。
- 社会福祉協議会の職員です。日常で見えにくい問題が災害時に表れることを過去の災害から実感しています。災害のプロフェッショナルを育てるというよりは、災害を見据えた日常のつながりを伝えていきたいと思います。過去の経験も元に実践しているお話はとても参考になりました。
- 「もしものときの備えはいつもの関係から」なのだとよくわかりました。皆さんの取り組みは本当に日々の暮らしの中で展開される、ある意味とっても面倒くさい部分だと思います。でもそれなしには顔が見える、相手を頼りにする信頼関係は生まれないのですね。わかってはいるけどちょっと煙たいような大切なことを、いかに楽しいイベントの中に混ぜて仕掛けられるか。「顔見知りの人から助ける」という住民の災害トリアージは現実にあったこと。人を選ばない災害に備えて、（できれば）気持ちのよい顔見知りの関係をつくっていきたいと思いました。